

史料紹介 森本州平日記（二）

東京大学文学部
日本近代政治史ゼミ

はじめに

ここに紹介する森本州平日記は、昨年刊行された『東京大学日本史学研究室紀要』第一号（二〇〇七年）に翻刻した、一九二九（昭和四）年九月から十一月までの日記の続きにあたる。また、一九二四（大正一三）年一月から一九二九年八月までの日記については、神戸大学教授須崎慎一氏による翻刻が、『論集』（神戸大学教養部紀要）三五号（一九八五年三月）から五〇号に連載されているので、是非とも参照していただきたい。当ゼミによる翻刻は、須崎氏の仕事を引継ぐ関係にある。森本州平（一八八五年～一九七一年）の履歴については、『紀要』第一一号に、『論集』三五号掲載の須崎氏による解説を載せてあるので参照されたい。森本家は長野県下伊那郡有数の地域名望家であり、州平は二〇町歩余の地主経営を行ないつつ、村内の産業組合長などの役職を多数兼務していた。

ゼミでの文書解読の鍛錬・研究のため、史料として本日記を読み、翻刻する上で、何の制約も課されず自由に使用する許可を与えてくださった森本信正氏にお礼申し上げます。また、前回同様、今回の筆耕にあたっては種々の便宜を与えてくださった飯田市歴史研究所の齊藤俊江氏、伊那近代思想研究会（森本州平日記を読む会）代表の松上清志氏にもお礼申し上げます。

演習の参加者は原則としてすべて筆耕にかかわった。参加者は以下のとおりである。志賀桜子、山本ちひろ、湯川文彦（以上、大学院修士課程）、山田良太（学部研究生）、有吉拓朗、井上陽介、梅田真治、大口智秀、太田仙一、国分航士、佐藤愛果、田所伸悟、中村友信、前田亮介、村井隆太、山本大樹、吉井文美（以上、学部四年生）、伊藤健、岩田周、宇佐美有香、江川守彦、岡本恵利、亀井大史、川口達也、佐竹康扶、谷森太輔、吉田興、吉田なつめ、米岡耕平、渡邊宏明（以上、学部三年生）。特に、学部生を指導し、ゼミでの報告原稿をまとめるにあたって、志賀、山本、湯川の諸氏の奮闘のあったことを特に

記しておきたい。

日記の翻刻にあたっては、漢字片仮名表記を漢字平仮名表記に改め、旧字体は原則として新字体に改め、不明文字については□で表記した他、可能な限り原文に忠実に起こした。なお、ごく一部、森本家にかかわる私的な記述、個人に対する評価にかかわる記述などにつき、〔中略〕〔後略〕あるいは*等で示した。

(加藤陽子)

森本州平日記 一九二九(昭和四)年

十二月一日 日曜

晴。朝七時新宿に着す。それより駿台荘に入りて入浴し暫く睡をとる。吉川亮夫来訪し銅像問題に付き話す。平野も来り会したり。吉川の主張は北原阿智之助へ予より頼めと云ふ。然らばとて急報によりて北原阿智之助に電話をかけ面会を申込み、銅像の件を頼む事とす。吉川、長野迄行けと云ひしが辰野にて会ふ事として長野へは行かず、午後〇時綾川氏駿台荘へ来訪し、大衆党に付き其綱領、政策のマルクスボーイ式なる事、国家社会主義の気分盛えたる事等を主張し、之れか更正を迫り、共に日本新聞社へ行き、北氏に電話にて祖国会館に会する事を約し、午後二時同会館にて北氏に会ふ。駅にて会い共に会館へ行く。会館は堂々たる建物にて富豪の豪奢を極めたる跡あり。案内せられて各部屋を見たる後、夫人及令嬢に伴はれて日本橋俱樂部に舞踏を一時間計り見物して後、大衆党準備会に臨む。神宮講本部に開かる。集まるもの三十五六名。各地よりの報告あり。皆既成政党、無産政党を嫌悪し、日本主義者の合同を計る。予も信州の状況を同様なりとし信州国民党の話をした。次で主義綱領に付て、国家社会主義的無産

的なる事を述べたるが、北氏も之に次で論断し稍議論沸騰せんとしたるに、論議は止めて実行論多き為、考慮を託して午後九時辞去す。夜行十時にて駿台荘より帰る。

十二月二日 月曜

晴。朝夢心地で諏訪を過ぎ辰野へ汽車が着いたか暗いのでよく分らん。漸く東天白み渡り外界を見れば何となく辰野附近の景とは異なり、狼狽して下車すれば小野なり。止むを得ず自動車を駅員備ひくれて(親切に)辰野迄走らしめたり。辰野にて北原阿智之助に会し、銅像の件、万一、出県し行き運動頼まる、も断りもらひ度旨、告げて話す。然して電車に投して飯田へ帰る。銀行へ入る。日曜翌日なれば店頭賑ふ。蕉梧堂へ堀内信水將軍投宿し居る由、中原より聞き及ひ直に訪問す。揮毫中なり。青島に於ける所感を揮毫してもらへり。席に市瀬、守田、松島等居合す。午後二時より商業講堂に於て信水將軍の講話ありたるも、丸山鶴弥より電話にて、糞尿問題に付、藤田氏と警察へ行かれたしとの事に、藤田氏と共に午後三時頃警察を訪問し、右の旨陳情す。藤田氏は糞尿問題解決まで使用を保留する様尽力せられたき事を陳へ、予は衛生思想を根本より破壊する事、飯田の用水中へも浄化装置をなさは放流しても差支なき事となるべしと陳し引上げたり。次て仙寿楼に将校会あり出席。落合中佐、堀内中将も来る。終つて松尾小学校に於て堀内中将の講話あり。共に来つて講話を聞く。社会の今日 天下の人心、既成政党無産党を離る。

十二月三日 火曜

晴曇。組合へ行つた。支所て本郷村(東筑摩郡)の産業組合の理事

が視察に来て見て行つた。之に応接して醬油醸造や其他の話をしてやつた。生徒を集合してセリブレーンの点数の良好なる様に試験法を改正した事及横浜糸合名会社に於て在来の繰糸機よりは能率数倍のものを発明した事を話し、整列の悪い点につきて小言を並へた。次て井深が試験法や如何にしてセリブレーンをよくするかの方法につき説明して、午後二時上飯した途中、本塩に会つて今日、姫城温泉に、鼎、上郡、松尾の糞尿委員集合して対策協議の事を知つた。又銅像の借地の件は付議却下となつた事を聞いた。銀行では別段の用もなかつたが不景氣深刻となつて金繰にも借計画を立てた。製糸資金放出の為に頭痛せざるを得なかつた。夜七時から本所で理事会を開いて、明日の製糸部委員惣代混合協議会を開く事、横浜糸市場の視察状況等につき話し銅像敷地却下問題に付話した。父が村長を退いて以来、県社に小笠原氏の揮毫にかくる偏額を奉納する事となり、其の披露式を行ふ招待状を書いた。併して村内団体長名誉職等を招く筈である。

十二月四日 水曜

雨晴。組合に於て午前中九時より惣代及製糸部委員会ありて之に出席し、横浜に於ける市場の悪化とセリブレーン本位の為、往年の如くノレン売れざる事、多年の習慣一朝にして変する能はざる事を陳へ、更に本年は解舒悪しく、燃料食費工費等昨年比して安からざる為、組合員の予期する程の配当は六ヶ敷かるべしと話し、糸合名会社が發明せる器械の話をなしたり。次て井深、操糸上の苦心より解舒第一を述べ、次て青山、糸市価と組合員経済に対する影響に付、話たり。午前中は予め組合員の了解を得る為、予備談をなし、午後、宗像技師の蚕糸に付ての話あり。松尾村の村治の事より組合村の事につき新たな

る計画を建てる要を説き、且製糸上解錦の必要なるを説明せられたり(二時間か、り)。終つて竹村順一と共に天竜峡ホテルに送り届けて帰る。耕地青年会の招きによりて金解禁問題に関する談をなす。飯田小学校新築、鉄筋コンクリの落成、一同来り三日迄開校式あり。糞尿を口過装置して松川へ流すと云ふ問題起り、丸山鶴弥、先鋒となり騒ぎ始めた。

十二月五日 木曜

晴。降霜多し。丑の日なれば年貢米収納の為、午前十時迄受付をなし、年貢米二百俵計り受入れた。銀芳手伝に頼む。父に譲りて上飯、銀行へ出勤す。南信新聞記者其他来訪多し。市村威人来訪し、思想史出版に付、直接注文の来りしものに付き、発送せられたしとの事なれば引受けたり。又下田史郎に電話にて荒井勝を配本に頼む事に話したり。石原茂一來訪し、「銅像建設地に付、田中、青山両人来場して強剛なる議ありし故、之を制し置けり。是非君が出県して予定地へ建設出来る様尽力するより外途なし」と話されたり。予は嘗て田中氏が委員会の際、青山氏と竹村順一氏と同行すべく話ありて其通り決したれば青山氏に行つてもらい度計画に居れりと答へたり。併し若し予の出県を要するならば責任上、予が出県するも妨けなしと答ふ。午後中原氏来訪し、思想史及猶興社に付其規約綱領等を議して夜七時帰宅す。信也へ学資送金す。金五十五円也。

十二月六日 金曜

晴。銀行欠勤。朝降霜多く、結氷せり。昨日電話にて福沢富衛より午前八時頃松尾生産煮繭量を視察すべく一力社組合員来組する由聞及

ひたれは、午前八時組合に出頭す。午前中此視察団の案内に費し、午後上飯する予定なりし処、田中荀一郎より電話にて三十分計り待たれたしとの報あり。待ちたるに彼、意外にも「銅像の建設地に付、予の言動に不審あり、特に予て大平氏を竹村順一^{カネ}か訪問したる際は、大平氏は賛意を表したるに、君が訪問してより其大平氏の賛意は手をひるかえす如く変じたり、若し君が此の如き意志を以て村長を動かし居るとせば、如何に此運動をなすも無駄なり」と云へは、予は意外の事を聞くものかな、大平氏の意志が予の為に手をひるかえす如く変ずるの理なし。男か信したる事を直に変ずるか如きは、他人の言にて去るをなかるべし、予は初めより此の如き事は慎重に世論を重んじてなすべき事として一人の不賛成もなき様希へり、然るに今君が予が反対の元凶なるか如く云はる、は不本意なり。唯し、予は衆議によりて自己の意志を交えず衆議に諮りて仕事をなし居るのみ、敢て組合長の職に恋々たるものにあらず。物にしてスラ／＼進まざる時は小言の出づるは世の常なり。君の忠告は謝とするも若し君にして疑いを有せば余は去らんのものと答へたり。次て青山を本所より呼びよせて意見を問ひしに、予が疑はる節は村協議会にあり。其節贈呈を主張したのは反感を招きたる一因なり。故に今回出県して疑を晴らされたと請ひ、木下千之助、田中荀一郎、竹村順一の三人と予と出県せん事の話ありたり。

十二月七日 土曜

晴。午前中銀行出勤したか、午後二時より県社に於て父の額奉納の祭祀ありたれば、親戚旧故を招きたる関係より、予も出張して来客の接待をなす。親戚側は上柳両家、三原屋、宮沢を招く。他は村内有力者、学校長、団体長なり。社前に於て式ありて後、ミドリに於て宴会

あり。其数六十名計、近來の盛会なりし。夜、小学校に於て山崎延吉先生の講話あり、ミドリの宴会後出席したが、眠つて居るより外致し方がないので中座して助役を招きよせて、銅像地の問題に付、村長と予との関係を話し、奔走方を申付く〔後略〕。

十二月八日 日曜

雨曇。午前五時半起床して龍門寺に臘入の静坐に出頭す。来会するもの組合生徒十名及平栗兄弟、市村等五六名なり。午前七時迄話して同八時十四分発にて長野県へ行く用事あり退出す。八時十四分発にて田中荀一郎最硬、木下千之助、竹村順一の三氏共々、銅像建設地の問題にて出県陳情す。嘗て出願せしものは却下となりたれば、之れを再三強硬に出願すべく右三氏を伴ひて出県したるなり。午後三時着、長犀北館に入り、吉川を訪ねたるに城山館開基会行不在、即ち城山館に吉川を訪問し銅像の件にて出長せし旨を告げ、更に平野桑四郎を煩はして社寺課へ頼む事とせり。吉川、平野共に快諾したり。犀北館に泊す。

十二月九日 月曜

晴。犀北館、朝、亮夫来つて早く仕度をせよと云ふ。午前九時に出県して平野氏を頼み吉川村長と共に竹村順一（氏子惣代）、田中荀一郎、木下千之助と都合五名、午前九時半打合せて社寺兵事課へ乗込み、平野氏の口切にて銅像を建立地払下方要望せられる、に付、何卒県の方のなし得る便宜をとられたし云々と陳述せしに、親泊課長は曰く「これは既に先般二名の委員にも詳しく御話した通り、神社地は境内外を問はず、銅像の如きは建てさせるものにあらず、之れは神の尊敬上よ

り止むを得ずとの話あり。又若し之を許せば神社の附近に塑像等林立することとなるべし。故に許可せず。斯くの如き例は、到る所にあり」と答へたれば、更に返す言もなく、平野氏も部長に会うかとの話もあつたか駄目な様子なれば、猶一泊して陳情するにも及はざるべしとて退出す。保安課に村田逸誠氏を訪ひ、汽鐘の件につきて話し、今林、高木の両技師の名を聞きたり。次に漁業課に太田技師を訪問し、養魚場設置及其大井に付、問合せて産業組合課に入り、汽鐘の事を頼みて後、部長には面会せざる事とし去つた。午後昼食し、下諏訪に向ふて去る。銀行欠勤。

十二月十日 火曜

曇。下諏訪の宿、丸屋泊り、朝七時起床、湯にしたる。霜屋根に真白く降り、大地凍りて小学校生徒の足音ひびく。勘定して宿を出て秋の宮に参詣して武運長久を祈り、神々しき神域に徘徊すれば自ら清々し。自動車にて岡谷に塩沢商店を訪問し来意を告げて、汽鐘を新に作製するに付、如何なる種類のもの最新式最経済的なるかを問合せしに、二階に招せられ酒等出しくれ厚くもてなし、種々、汽鐘及経済的度水除去機取付に付き懇ろなる説明あり。午前九時より午後一時半迄饗を受けたり。塩沢商店員の案内にて尾沢片倉、高木片倉等、工場の汽鐘を検し、経済 及汽鐘と線糸釜数等につき、種々説明を聞いた。得る所あり。塩沢に礼を述べて駅前にて別れたり。伊沢オクミ、岡谷駅にて一所になりたり。岡谷より帰途に付、飯田着、午後六時半、電車中、市瀬繁に会し、共々飯田児島にて夕食をとりて午後九時帰宅す。銀行休む。

十二月十一日 水曜

雨。数日来の旅行と下痢とて体稍疲労と倦怠を覚えたれば、終日勤王思想史でも讀みて静養せんかとも考えたが、家居するも年貢米の入庫其他にて静養も出来されは十時頃より銀行に出勤す。両三日欠勤したれば書類山積して一覽するに急忙なり。猶且、尊王思想史の頒布等につきては銀行にて引受け、吉川をして之に当らしめつ、あれは其報告も聞き度く出勤せり。放課後吉野、今村兩人来り、鳥金にて夕食をなしつ、予と中原、吉野、今村の四人にて近來特に政治の腐敗しつ、ある事を慨し、猶興社の組織の急務なるを説き、外郭運動としても猶興社なるものを組織せん事を議し其の綱領を全国興国同志会の綱領を基本として猶興社の綱領を作製せり。又若し万一吾党よりも立候補せんとするの時は中原を出陣せしめん事等迄話し合へり。午後十一時帰宅。

十二月十二日 木曜

晴。組合支所に行き青山に面会して長野行の話をして、県にては(一) 神社の崇敬を保持せん為準境内地に於ても型像等は建設せしめず(境内地は広きをよしとすれとも免税地の関係よりして広きを得ること難し)。(二) 他に次より次へ此種の願出てんとする時は共同墓地の如き地となり益々神域を冒瀆せん、故に他に適當なる所あれば建立せられたしとの事なり。次て岡谷へ行きて塩沢を訪問して汽鐘を見て來た話等せり。歳末賞与等につきて打合を行ひ、次て江塚佐三郎に会ひて糞尿問題にて出長の模様を聞く。次て上飯聯合事務所に入る。校長会あり作興会出版、伊那尊王思想史の出版出来たる事、及残部僅に存すれば申込まれたしとの紹介をなす。又下田史郎と作興会昭和三年

度決算に付き話合せたり。然る後出勤す。赤穂共栄社の成敗岐路にあり、宮沢、下島等上京中にて金田を呼び寄せ居れば金田を出張せしむ。予記 下伊那農学校運動場拡張費中へ金五十円寄附せり。

発信 (平野桑四郎 宗像宗吉 杉原定寿) 礼
受信 吉川亮夫

十二月十三日 金曜

晴。組合へ迂回して銀行へ出勤す。年末にて銀行多忙なり。赤穂共栄社の興廢問題に付き金田出浜〔横浜へ出張すること〕す。先方より通知に接し相談の上出浜せり。太平頭取県会閉会後風邪にて小妻屋に宿泊静養中なり。電話にて其病状を問合せたり。午後一時より役場に於て農会主催の肥料研究会あり出席す。併し肥料に就ては別に意見もなければ只管農家小組合員の研究の結果を聴取せり。午後四時閉会後本所組合へ行き組合内を巡視し、釜場を見て帰途第二工場にて青山に会し、生花講習を見て帰宅す。警察より廻されたる赤賊〔共產主義者との意〕豊*直の*記に関する感想文を見る。

十二月十四日 土曜

晴。直に銀行へ出勤す。多忙の日なり。松下莊三に葬式あり会葬せり。伝島町支店を訪問して小原支店長に千代田生命保険代理店事務を取扱はしむる事に付き内命を下す。太平頭取長野にて病氣し居れば電話にて来る十八日重役会開催の件通知せり。午後四時頃邦文堂を招致して年賀状印刷に付依頼せり。中原謹司来行し、明十五日文星堂ホールに開かるべき猶興社相談会に付協議し、下田へ手紙にて綱領及会則原案出来居るや否やを問合せたり。午後六時帰宅の上、豊*直の*記

を読んだ。右は館林氏より閲覧せしめえたるものなり。大逆共に天を戴くべからず。

予記 吉川亮夫より帰村の通知に接す。

十二月十五日 日曜

晴。暖気と湿気にて外套は不用なり。午前中組合支所へ行き万事監督して午後文星堂ホールへ行く。予カネチ而より予及中原が後見役となり吉野、今村中心となりて猶興社なる愛国団体を結成すべく用意したるが、今日文星堂ホールを借りて開きたり。中心なるものは曾て作興会主催の下に上京講習をうけたるものとなり、次に那青年及壯年を糾合して猶興社なる団体を作る事とし、其の綱領は興国同志会の綱領に多少の修正を加へて作り、宣言は同会が昭和二年に之を宣言したるものを其儘援用せり。会則と同じく之に則りて作り上げ、午後一時より吉野、今村其他十四五名集り原案の通り略決定し、各新聞に之を掲載する事とせり。之を以て愛国大衆党と関係し中央と地方と相呼応して祖国の危機を救はんと志す。各新聞社へも通知して其主義綱領を掲載せんことを頼めり。

社会の今日 小橋前文相収賄決定。

十二月十六日 月曜

晴。組合へ迂回して銀行出勤す。年末多忙なり。放課後聯合事務所にて下田を訪ね作興会決算を見て幹部会を開かんと志せしに、市村新宅を新築し之に移転したれば之か落成祝をせんとて、禅仲間の丘山和尚初め平栗兄弟及子を新舎に招待したれば、其れに参加すべく六時出勤す。為に作興会々計検査出来ず、市瀬と話し合いて出づ。市村を八幡

の新邸に訪れは新邸は広大ならずと雖も竹林の清々しきを負ひて代田山を庭園中に容れ南向暖にして、一京都西山辺の如き心地す。よき新邸なり。心尽の饗をうく。食品皆精進料理にて美味なり。午後十時迄話して散す。清遊なり。〔中略〕又米の買方を頼みたり。

発信 綾川武治、中谷武世

十二月十七日 火曜

晴、暖。暖にて外套を不要。地震にても襲来しそうな陽気なり。午前十時銀行出勤す。電話及手紙にて、来る廿一日午後四時より仙寿楼に於て曾て聯合分会より贈呈せられたる銀盃の披露を聯分の評議員になす事とし、之か招待状を出すことを下田に依頼せり。仙寿楼にも亦其旨を頼み二円半位にて一人分なす事にせり。午後一時信聯楼上に於て製系組合の組合長会議あり出席す。原幹事長の、操短問題は嚴重に行はれたき旨殊に注意あり。次て清水より中央会の説明あり。予は二月より五月迄、二割操短に対して腹案ありや、又出荷を制限するとせは其の成行約定の如何にすべきか、又操短に関しては二割を成行後とせは如何にすべきか、之に対して足並くずれずや、等の質問をなし、信聯より底利資金を得て二割分出荷に対して融通すること等を申合わせたり。銀行の決算予定出来たれば之を明日の重役会へ呈出するに付。発信 宮沢弼、白隠の画一つ

社会の今日 俵商工大臣も亦収賄の嫌疑かゝる。

十二月十八日 水曜

晴。六〇。暖なり外套を着せざる方心地よろし。組合を経て銀行出勤。組合にて青山と面会して未だ竹村順一帰村せざれば銅像の件打合

会開く迄に至らざる旨を告げ、釜場の件等も打合して去る。銀行に出勤して中原に打合せしたるは猶興社の規約宣言等印刷出来たれば之を同志に頒布すべく、吉野、今村両氏の会同を乞ふべき事として話出来たり。午後一時重役会にて吉川、井村、上柳四氏来行し共栄社の件、篠田の資金申込の件相談し、前者には最小限に貸出す事、後者は断る旨を決して後、仙安に於て夕食を喫し午後八時より聯合事務所へ行き、下田書記と作興会決算書類に付検査して十一時半に及び、遂に全部を終らすして帰る。山口英九郎氏に思想史一部贈呈す。

十二月十九日 木曜

曇。銀行へ出勤す、篠田峯一來行し資金融通を懇請し居れば、会ふも悪しければ池田屋を訪問して店頭にて主人等と悴の法螺話に加えて炙の研究の結果を聞く。やがて銀行に帰りに篠田に面会し重役会の結果を答へ、資金融通は困ると云ひ放てり。原貞次郎来行し作興会会計並に廿三日午後一時より開かるべき幹部会予算編成の件につき打合せ、明年度予算は事業整理を行ふと共に緊縮したる予算を立つべき事につきて話合せたり。午後五時より青山と共に佐々木光雄の祝儀へ招かれ、金三円を祝儀として包み本所を経て出向す。愛国大衆党より入党届等送付し来る。主義政策等も又送り来れるも、面白からざる点あり。吉野今村を呼びよせ、中原宅にて猶興社入社を依頼する件につき相談してもらふ。予は欠席す。

十二月二十日 金曜

雨。朝床を離れかねて八時迄床て考へたり。組合の事銀行の事作興会の事、猶興社の事及近時盛に新聞を賑はしつゝ、ある大官連中の収賄

政事の腐敗、其の結果は我国は何如になるか等、脳裡を往来し、特に作興会の件及思想問題に関しては、考へれば考へる程不可解となり、今後の推移心にかゝりてやかつて日本は自滅せざるべからざる運命となりはせぬかと云ふ様なことも考へられる。起き出たるか、前夜の祝儀の酒の為か気分重々し。組合支所を訪れ、次で直に銀行へ出勤す。栗林及篠田等来行し借款を申し込みたるも、之か解決を自信を以てなすことなく、多くは支配人等の意見によりたり。併し自ら銀行業に携はりて此の如き權威なき仕事も面白からず。電話にて組合本所木下房吉に對し持分を村々に振替の件につきて定款違反とならざる様注意すべしと申渡す。又市瀬に年賀状を用意することを命ず。太平未だ帰行せず。

予記 下男慶太を銀行小使として雇入することに關し彼に告げ、又父と井戸掘に關して協議す。糞尿問題に付丸山鶴弥来りて飯田小学校庭へ穴を掘つて浸みこましむる様に決したり。

受信 丸山義一、山口英九郎、思想史の礼

十二月二十一日 土曜

雨。朝信也帰宅せり。父母家族皆悦ふ。紅梅の盆栽を持ち帰り、之を炬燵の上ののせて眺見。一家和氣藹々たり。組合に行き*次郎の家政斉理の話をなすべく、*次郎に話して組合にて待ち居りとも来らず。銀行に向ふて去る。大平頭取県会の末期より輕き肺炎にてなやみしが輕快となりて帰行し出行す。種々不在中の件に報告せり。富栄館事件の示談したしとて、恩沢、宮下署長等來訪し、之に面接し具体案は出さざりしも示談は望む所にあらずとし、示談出来るよう話されたしと望みたり。午後四時より聯合分会幹部を仙寿樓に召き、銀盃披露の宴

を張る。來会するもの上記の如し。兩三人欠席す。塩沢治雄式に來飯し彼より*鳥*雄が青年會長として人望なき事、及青年選挙の結果等につき報告を聞けり。仙安に清雅会あり。会費を持ち行き太田に支払ひたり。

十二月二十二日 日曜

晴。雪風越山に降る。朝丸山鶴弥来り、飯田町との間に糞尿問題に付県衛生課の手を経て解決出來、小学校庭に深き坑を穿ちて泌浸せる装置を作らしむる事となり、解決出來たる由を父に報告せり。又其の費用三百円の負担方法として、半額を松尾村にて負担し、余の半額は上郷と鼎とにて折半して分担する事となりたる由なり。次で*次郎を招致して昨朝組合にて話す筈なりしに來らざりしは如何にやと詰り、次に青山に依頼して見るべしと告げたり。組合支所に行き木下千之助を招きて長野行の旅費に付打合せ、且又上田県下産業大会長野県社事課出張旅費等の事に付話し、又銅像設定地として組合附近を選ふべき旨を話す。次に本所に行き青山に面会して理事会委員召集につき話合ひ、種々打合して夜八時帰宅せり。青山殆んど事務を委せあれば稍專斷的なり。汽罐場の事其他に付打合たり。

十二月二十四日 月曜

晴。銀行欠勤す。組合に理事会を開き午後一時より銅像建設地としての社有地は遂に県の許可する処とならざりし旨報告会を開き、銅像委員及理事を集めて話し、猶將來如何なる地に建設すべきかに就き相談せしに、田中等は学校前を主唱して譲らず、遂に本所近傍及桜畑学校附近に候補地を定むべしとの事となり、其の方法をとる事に決せり。

田中荀一郎の議論にも驚きたり。予め奥村嘉蔵、吉川順次郎等にも組合附近がよいとの旨申伝へ置きたり。談笑の間に話出来て散す。後上飯して頭取の催なる忘年会に臨めり。後仙安に**の千代田生命代理店引受の宴あり、出席せしに伊藤麻吉なる代理店係なるものグズリ出す〔後略〕。

十二月二十五日 火曜

晴。組合へ行く筈なりしも午前中休養せんとす。併も休養も出来ずして午前十時組合支所に到り午後三時より招待せられたる市瀬政茂の祝儀に列す。青山金三郎仲人となり上郷村より嫁をもらいたり。木下房吉と二人にて出席し、十二時迄飲みたり。組合支所へ金田及**兩人来訪し、〔中略〕支所醬油井戸水修理をなす。

社会の今日 政府解散説多けれども解散はなかるべし。

十二月二十六日 水曜

曇。直に銀行に出勤す。猶興社の宣言綱領を佐々木をして書かしめ、発送方依頼せり。思想史売行少なく、配本費等の交渉も来り手数多し。丸山鶴弥来訪して糞尿問題の費用に付如何にすべきかとの話あり。村長に面会して銅像委員会の模様を話し、尚糞尿問題の費用を衛生費として支出せん事を話して後飯田に向へり。

社会の今日 下伊那郡下候補者なし。

十二月二十七日 木曜

雨。組合支所で青山と銅像建設地の事に付打合せた。青山は昨日村長吉川と面談した話をして始は堅苦しい事を言ふて居たが、最後には

十中九分通りは宜敷と云ふ事であつたとの報告ありたり。予は次に丸山鶴弥が糞尿問題にて勘定総入費三百円の処、鼎、上郷二村と松尾一村とにて半額宛分担し、百五十円と松尾委員のみにて単独に消費せしものと合せて二百五十円計りの割当に付研究しつゝ、ありしが、村は三十円より出費出来ずと云ふとの事にて、然るは衛生組合費として出金せしむるより外方法なかるべしとて、丸山鶴弥及中島勘一に申渡したり。次て役場に村長を訪問して桜畑を建設地としては如何と話せり。村長は可ならんとて話一決し、地主より承諾書、八幡町より同意書を取り置くべき旨青山に命ず。午後出勤す。思想史、荒井勝に頼みたるものは取金少なく下田に注意せしめたり。聯合事務に各種団体長会あり。昨年度予算に付打合す。

予記 議会の解散説は多けれども予は回避すべしと思ふ。

発信 年賀状三百枚発送。

社会の今日 議会解散の説高し。

十二月二十八日 金曜

雪。飯田町は積雪三寸余。朝九時より南〔信〕倉〔庫〕問題に付銀行重役側の相談ある筈にて出向す。併し南倉の問題は信濃時事新聞にも曾て大々的に掲載せられ太田実蔵氏が繭を買はしめたる事や倉処料金がとれない事や損失が通期四万五千円もある事等が新聞紙上に発表せられて一問題起らんともし居るので、井村社長も大平も皆困つて居た事件である。太田氏の責任行為があるので誰も引受てやるものもない。大平氏が曾て銀行問題に種々論議した時に繭市場南信倉庫銀行との三角関係を理想として行つたのであつたが、之れが失敗の賜であるので、大平氏も何とも口の聞き様がなかつた。併し予は大体方針は

立つて居た。上柳参太郎の後を引受ても、之れは結局銀行が引受るより外に仕方がない。青山から電話で今日銅像委員会を開いて敷地を決する旨の報告があつたので午後三時八幡へ自動車で出向したが雪の為に妨けられて、吉川芳太郎を訪問し南倉問題等を話して再び銀行へ帰つた。南倉総会に出席したが何の事故もなしに総会は終了した。

予記 北沢利隆が来て政友倶楽部維持費をくれと云ふ。昨日は少しは出すと云ふて置いたが僕が出すのは変たというので五円だけ出金寄附した。放課後頭取と報酬の問題を決し予か日勤は出来ないと申出て置いた。

発信 年賀状三百枚邦文堂にて謹賀新年と書いたのを発送した。

十二月二十九日 土曜

雪。積雪三寸まで降りたるも溶け道薄深し。組合支所に至りて青山の来所を待ちたるも遂に来らず。醤油部水道修理したるものを検じて出づ。銀行は今日は日曜なるも殊に利子受入を名として午前中開店せり。役員報酬金及行員賞与金等を決して午後組合本所に役員会を開き置きたれば出席す。問題は病貧者救助に関する件及銅像敷地報告等に関して話し、二名の病貧者を救助する事として後、丁度来所したる鈴木和蔵の納入せる鯀に関して予て西より不正品を納入したりとの悪宣伝を發し、之を組合員にて信するものあり。相場も下落し居れば此の如き物言い付きたる商品は破約する旨を申渡せり。各理事も居合せて之に決せり。西の悪宣伝も非人格的商□なるも、若し鈴木に不良商品あるとすれば許し難し。燥糸終了、娯楽会を催し生徒の娯楽を見て帰る。十一時也。

社会の今日 解散非解散説しきりなり。

十二月三十日 日曜

雪。春の淡雪の如し。降積る事三四寸に及びたるも消え失せ湿氣多くして寒氣甚しからず結氷もなし。凍豆腐屋連中(マ)旭松印等名つけて澎軟豆腐と別に組合を組織し、大阪芝甚商社等とも出荷の約束出来、和田一なる県下水豆腐(文化)と離れて新販路を開かんとするの時、暖氣の為作業出来ず、損失多かるべし。組合支所を一巡して上飯出勤す。午後一時中原を聯合事務所に訪問し、予て佐々木か話をして騰写せしめつ、ある、共產党の供述を見、中原と作興会に付相談して分れたり。銀行では大平欠勤したり。午後六時迄居り帰宅す。年賀状を銀行より出すべきものを書きたり。

社会の今日 清水越トンネル貫通の報あり。

十二月三十一日 月曜

曇。午前中犬塚利国来訪し、父に直入の画帖を売り付けたるを見る。思想史一部を売り付けたり。組合支所に行き青山と打合して午前十一時半銀行に出勤す。竹村要人、御子柴、牧内良太郎等の面々、金策として来りたれば午後三時半銀行より牧内良太郎を残して去る。牧内良太郎は予を訪問して金策を依頼せしも、予は之を逃れたり。組合支所に来りて貸金整理の状態を見るに、支所のみにて未整理に属するもの二十件計りあり、特に件数金額共に久井耕地に最も多し。銀行より支店純益金の報告あり七万余円、本店六万余円あり。其内に行員賞与其他有價証券差引したる由等を聞けり。組合より家に帰り年取の宴に列して再び組合支所に到りて本所に電話にて整理状態を問合せ、午後十一時終了して帰宅せり。大平重太郎を病床に訪問し、銅像敷地の県不許可の状況を報告し、種々心配をかけたる点に付議して県へ呈出した

る書類等を返却せり。

補遺

一月十九日 朝九時、風越館の裡奥座敷に渡辺萬義師を訪ふ。談偶ま日本国打開の途に及び、乾坤一擲の節は大に共々新日本建設の歩に進むべしを誓ふ。

十月六日 下伊那聯合分会総会あり。副会長として永く其職に居りたる廉により表彰をうけたり。銀盃三個を受く。

右十二月二十一日 仙寿楼に於て披露宴を開き聯合分会幹事を招く。

二月五日、松尾信用販売購買組合長就任せり。

十二月二十八日 南信倉庫重役に就任せり。

作興会記念出版として伊那尊王思想史を発行人として引受発売す。

一九三〇（昭和五）年

一月一日 水曜

快晴、無風。鎮守の初詣にも学校拝賀式の序に行く事として朝七時起床す。昨夜組合支所に居りて十二時過る迄も勘定に来るものありたれば事務員を督励して居たれば元日の朝も早からず。例によりて家族打揃ふて午前八時大福を喫し互に御目出とうの挨拶を交す。信也、尚夫、宏、和氣子、喜々として坐右にあり。父母も亦健在なれば和氣藹々たり。一茶の「元日や何はなくとも御両親」の句も思ひ浮ふ。午前十時より小学校に拝賀式あり。父と信也と共に参列す。体操場も一杯にて余地なし。役場の御神酒の借りも完済し居らず、戴かずして帰宅せり。式後八幡社を拝して組合へ行く。組合本所二階講堂にて新年の賀宴を開く。事務員及従業員へ足袋二足宛（五十五銭）を贈る。午

後三時歸りて伍組内の新年会中島にあり出席す。伍長は峯太郎、耕地評議員は中島、新惣代は晴男を推す事を決定せり。年賀客としては湯沢隆三来る。思想史一部を持ち行きたり。

予記 本年も静坐の閑もなく過くらし。去年は組合にて不図御み籤様のトの本あり。取りて見れば「汝の様な口のき、方をする人にて軽せらるべし」とあり。此言は一年中の金言として軽々しき態度を戒めたり。

一月二日 木曜

曇雪。昨日の晴天に引かへて今日は曇る。一般に氣候暖なるも今朝は結氷せり。凍豆腐の製造は結氷初見になるべし。朝湯を焚くとて紅葉の落葉を焚き居れば猪佐雄来りて年賀す。吉郎、平、順太郎及隣の三軒に年賀回礼す。年賀に来訪者少し。塩沢治男来て年賀す。猶興社の発起人たる事等も話せり。夜に入りて龍門寺へ年賀に訪問し和尚に閑談を交えて八時頃帰宅し信也を相手に年賀状の整理及新に書き送るもの等五六十通書きたり。夜降雪あり積る事三寸計り。春の淡雪の如くとけたり。猪佐男、飯野又一を担きて耕地惣代として奔走し居りたり。尚組合としては晴男を推し他一名は自由問題とせり。

予記「初日おろかも潮さひ巖に蟹も居て」

一月三日 金曜

晴。午前六時半より起きて福縄を作る。下男慶太、信也等を相手として容易に作製したり。朝、団欒、例年の通り芋汁の宴ありて書斎へ引籠りて年賀状の整理及年賀状の出しおくれたるを書き等せり。中原来訪するかと心待ちに心行くはかり話さんかと思へり。午前中は終つ

て午後木下裕祐、橋爪和男、牧内良平等年賀に来り、慶太郎、太次郎、茂一等も亦年賀に来る。午後六時より耕地の初集會に臨む。耕地委員の投票あり。猪佐雄と五番組と連絡して大石又一をかつき、策成れるに反し、丸岡屋の方は中原も森本多賀次郎もまとまらずして遂に晴男六一、又一四六次点、中原二〇、中島勸一一五、多賀次郎一二位にて終了し、大石の新任の喜はしき挨拶あり。夜に入りて中原來訪す。十時迄話して去る。一橋会児島に於て開かる、筈なりしも無期延期となる。尚夫、山本へ年賀に行き、信也座光寺へ出向せり。

発信 年賀状、井深、横田秀雄

一月四日 土曜

晴。銀行の始まる日なり。午後一時より重役會を開きあれば出席したり。和服を着て出勤す。組合は顔を出さず、電話にて市瀬に組合従業員の勤惰表を作り置くべき様命ず。又役員會を七日午前中開くべく命せり。銀行業務中、年頭にて忙はし。各銀行等新年の挨拶に來行し之に接す。松沢数一來りたりは塩沢正三の來飯を告げて一夕餐を共にせんと告げたり。又代田市郎、安藤兼太郎等へも同し事を電話にて告げたり。南信倉庫重役會あり、午後三時出席す。市瀬俊太郎、井口文次郎來る。銀行側よりは太平、吉川、井村、予出席し、社長兼専務に井村氏を推す。南信倉庫の前途面白からず。銀行にては之れが出資を個人的とせず銀行にて処置すべく持分を平等になす事等を論ず。重役會にては予が營業の概況につき説明せり。信産は市瀬頭取來行して七分配當の止むなきに至れる事の話ありたり。十九日総會の由。重役會終了して東精軒で晚餐あり。行員等も出席す。

予記 忙しけに過るべからず、泰然たるべし、黙々として動くべし、

軽惚なるべからず。予は重役會席上にて銀行日勤は出来ぬ由を申出ず。

一月五日 日曜

晴。夕方雪チラ／＼。朝九時家内団欒して喫茶して後、組合に出勤す。青山専務に會いて種々打合せんとて出てしが、來組せず、井深に工男工女の件につき打合せ工男二名工女三十数名を新に入組せしむる事等につき打合せて後、本所に行く。市瀬をして七日午前中役員會を開くべき旨を相談して後、木下房吉を鈴木和藏の不正鯨粕搬入に關して如何にすべきかに付、打合せをなし上飯す。塩沢正三の來飯を期して共々會食せんと相談して中原、安藤等と仙安に會食す。塩沢多貴子も共に來る。正午より午後六時迄共に懷旧談をなして後、仙寿樓に開かれたる社交俱樂部の新年會に出席す。塩沢、中原も同行す。夜八時帰宅。銀行社交俱樂部の当番なりとて此社交宴に出席せり。

一月六日 月曜

晴。凍豆腐が出来る様に寒くなった。結氷し出した。朝組合支所に行つて青山に會つた。併して本年度の大体方針の事から昨日の理事會の事迄打合せた。丁度江塚佐三郎も居合せて相談した。本年度の建築等に付ては釜場は何とか応急の事をして置いて煮繭機の据付を第一工場へする事位にして置いた。猶、種々に打合せをして午前中に上飯した。伊那社へ立寄つて先頃地元検査の事を報してくれたが其の様子は如何かと清水謹一に面會を求めたが、未だ來場しなかつたので山岸技師に會ふて歸つた。未だ其方法も確定はしない様子であつた。午後になつて銀行へ出た。原貞が来て居て警察の館林を招いて思想方面の話を中原と北京に原と予と四人で聴く事を十二日夜と約した。午後六時

帰宅した。信也が夜半に腹痛かするとの事に閉口して居た由を聞く。大衆新聞に予か塩沢を招いて候補に推す話をしていたと書いてあつたとの事をきく。愛泥来行せり。

予記 朝、代田の青年が来訪して金解禁の話をしてくれとの申込があつたので八日と引受けた。

発信 中谷武世、中原立つ事を申送。

受信 矢沢有一から敷島寄贈。

一月七日 火曜

晴。組合、昭和五年度始業式あり。朝十時より理事会あつて銀行には出勤せずして終日組合に居る。午前十時よりの役員会の議事は新設として第一工場へ千葉式煮繭機を据付ける事なり。其他としては大體方針は整理時代である、生産費の合理化、冗費の節約等を以て其他組合設立二十周年は決定せずして春秋の季立を行ふ事とし、役員会に付ては時間勵行する申合をなしたり。午後二時より始業式あり。製糸部員、委員、役員出席し、来賓としては団体長甚少し。予は戊申詔書を奉読し開会の辞を述べ、賞品を授与せり。後、宴を開き組合独特の料理にて散す。生徒に迄酒を供したるはよろしからず。

一月八日 水曜

晴。銀行へは午後出勤す。午前中組合支所にて青山未出勤なれば清水ブローカーに上り繭、選出等売る。十二月二十四日頃売りとると同値なり。然る後、午後一時頃銀行には出勤せり。組合は新年の操糸始の日にて午前九時頃より操糸始めたり。其の状況を視察して後、銀行へ出勤せり。銀行放課後、龍門寺に於て懷石の饗に招かれたれば午

後五時出頭す。平栗、市瀬、高橋、与八、兼平等にて無門会のみにて懷石の料理を頂戴する方法より教をうけて上記の如き献立にて心尽しの饗をうけたれとも、午後七時より代田青年会の金解禁問題に付ての講演を頼まれ居たれば出席の為、コイ茶は省きて代田に行き集会所に於て青年男女に対し金解禁と国民の覚悟と題して話し、午後十時再び龍門寺を叩き十一時散す。会席料理此時にて二回目なり。八寸の料理は和尚の最も意匠をこらしたる「磯辺の巖」なり。

予記 膳

汁 八丁ミソ、人參、大根

向 オンヨーコン、スノウド、大徳寺ユバ

椀盛 ミツバ、フキ、竹子、ヤマ芋

焼物 茄子新ヤキ

取サカナ 瓜モミ、フキノト、揚物

吸物

八寸 昆布、岩たけ、浜納豆

一月九日 木曜

晴。組合支所を経て午後一時銀行へ出勤す。既に組合と銀行との中、何れを取捨すべきかは既決の問題なれば銀行に対しては稍不熱心の点あれとも止むを得ざる事なり。行員異動等につきても考へさせられたり。放課後東西両上柳に年賀に行く。上柳喜右衛門、川路へ年賀に行きたりとして不在。辞して西上柳に行けば伯父も大元氣にて自画等とり出て示され夕食の饗をうけて午後九時迄話して帰宅す。伊那社に岸技師を訪問して伊那社が出張検査をなす事、共水等へは販売をする事等を話をきき、又伊那社が春挽に付如何なる態度をとるかに付、其の様

子を見るべく訪問したるに、清水氏不在にて、山岸技師と話して辞す。日米系のものは日本蚕糸会社を組織し出張検査をなす等の説を聞く。尚夫に万年筆を買ひ来り与ふ。下男慶太、上飯田へ竹細工の講習に行く。五日間計り続く筈。

一月十日 金曜

晴。北原阿智之助を訪問して作興会に関する打合せをなし旁々年賀をかねて午前九時訪問す。作興会の件は本年役員改選、青年幹部講習、建国祭、記念図書の発行等に関して大体の話をなし昭和五年度予算は前年に比して一割減を以て編成する事等を話して一時間計り居りて辞す。吉川亮夫は如何なる人物にや等の話も出たり。予は彼は政治家的手腕ありと答へたり。銀行にては行員賞与金配当案につき頭をなやましたり。終日作興会及銀行にて午後六時帰宅すは庚申講へ行つて来いとの事にて中島へ行く。椀屋、泰治、孝之等居合せて雑談にふけりて午後十時帰る。酒は健康上宜敷からざれとも二合計りは飲みたるべし。下田に電話にて荒井勝へ作興会思想史配本収金に付片付をなすべく申送り方を申付く。厚平来訪。

一月十一日 土曜

曇。朝八時迄床に居りて作興会の事より組合の事、銀行の事等順次頭裡に浮ひ来り去つて、殊に作興会の事は自ら之を憂ひ率先して主唱し会を作りて狂奔(?)しつゝ、あれば(世評も紛々)今後如何に終末を告ぐべきか等につきても考へさせられたり。又組合と銀行何れを取捨すべきかに付ても友達の忠告もあり自らも亦組合事業に終始せんと希望もあつて今後組合に尽瘁せんと決心せり。組合支所にて江塚佐

三郎と事務打合せ、又*村*六を訪問して整理脱退、利子支払、除名の内一つを選ふべしと告げたり。本所にて整理状態を視察し、青山と諸事打合せて午後二時上飯せり。大平頭取は上松へ労慰金を打算し面会せず、放課後今田、原田と共に行員賞与金に付打合せを行ひたり。吉野福一來訪し、作興会青年幹部講習会に付て打合せ談合。女子青年講習会及び高松多勢子を訪問して頼みては如何と云ふ事になり、同氏を夜七時訪問して頼みたり。即答は得さりしも快諾を得るべき様子なり。午後九時帰る。

予記 厚平来訪して桃の剪定等なせり。

発信 田代竹司

社会の今日 金解禁の日。

一月十二日 日曜

晴。組合支所へ行つた。終日支所て監督等して終つた。午後三時頃池田寿がやつて来た。彼は近頃点炎の効能のみを論して居た。本所へは行かずして終日支所に居た。今村太六か組合を脱して整理脱退をする書類を調印して出した。

一月十三日 月曜

晴。組合へ出勤して大梓の竹下を結束状へ廻し、塩沢輝雄を結束より大梓場へ出勤せしむる事とした。其の就業の模様を見て後、上飯した。監査の日で午後一時より吉川初の重役監査役等出勤した。別に監査上何の変わりもなく午後五時終了したれとも風邪の為か悪寒を催し頭痛すれば重役の宴会を断つて帰宅して入浴後直に寝に就いた。此日南信新聞では政友倶楽部に重役会あり。伊那社には松本技師、宮崎技師

の講話があつた。伊那社では近頃検査の統一を図り日米製糸会社（日米）と特約して地元検査により直輸出を企図して居るので国立生糸検査所の技師を頼んで来て講演したのであらふ。我組合の出荷も之に関係があるのであつたが自分は欠席して井深を出席せしめて置いた。社会の今日 議会解散は不可避と見込み、政界動き出す。

一月十四日 火曜

雨曇。組合へ行つて江塚から伊那社に於ける松本技師の講演の要領を聞いた。要するに国立製糸検査所の検査を取引に応用して其の検査を以て公定相場の標準とすべしと云ふ事であつたとの話であつた。午後上飯して銀行で事務を見、行員の昇給案を考へた。頭取も来たけれども全体で金百円位の昇給に止むる事を相談した。吉野が放課後上京の仕度をしてやつて来た。そして下田と中原と吉野と予の四人が吉野の上京に際して如何にすべきに付、打合を行ふた。愛国大衆党へは猶興社と云ふ団体を作つてそれによつて団体加入をする事及下伊那の政情は中原を立候補せしむる事を条件として作興会青年幹部講習会の件に就きて吉野を上京せしめた。仙安に銀行同盟会の新年会があつて大に飲んだ。稍頭痛がするので控へて居たが遂にダンス（ダンス）をやれとクジに付、筆筒を書いてやつた。

予記 下伊那に於ては政友は伊原逃げ平野、代田か立つ事とならん。民政は北原、遠山、中原の呼声あり。両者共腹のさぐり合なり。

一月十五日 水曜

晴。三月末の天候である。温暖にして風暖し。朝、銀行出勤せんとして居ると明の田中某が来訪した。其の話に松尾へ禁酒会の修養団体

を作つたから是非顧問又は賛助員となつてくれとの頼みであつた。見れば原や田中勇太郎等か記名してある。予は自ら禁酒する事は出来ない自ら出来ない事を他に勧める様な偽善的人格は持たない故に御希望に添ひかねると云ふて断つた。次に上溝の某か来て鼎村の人で松尾の凍豆腐組合には加盟しては居るか資金が困るから松尾組合から貸してもらへまいかと云ふ尋ねであつた。資金は出来ないが製糸は一所に取扱ふてやらふと云ふてやつた。若し資金か入用であれば銀行に頼むより外法方かないであらうと付加へた。銀行へ行つた。放課後大塚がやつて来て借入の利子をマケてくれとの話であつた。又春台荘の出資金の利子払を最後にするから利子払はマケて元金は例の通り御支払致すにより利子ダケマケて（不利子）もらい度と申込みあり。承知す。併し宿泊券だけは必ず欲しいと云ふてやつた。

予記 野原へ年賀訪問して政治談や骨董談を試みた。欄間の幅は鶴亀の波間に泳ぐ文兆筆の名画であつた。三原屋より買ふた火鉢に銀瓶か、つてあつた。又次に中原へ同しく年賀へ行つた。田中荀一郎も桑山も来て会ふた。桑山は中原の立候補を力説した。

一月十六日 木曜

曇晴。結氷もせず暖な寒中である。道を歩けば三月頃の様にホカ／＼する。湿気も大氣中に多くふくまれ梅の花の咲き出しそうな天候で全く極寒の天候ではない。今日は終日蟄居して新聞を読み思想史を繙き、佐久間象山先生の書を欄間に掲げて見等して気を養ふ。金田の所へ手紙で休行するからと云ふて送つた。又、吉川の所へも佐々木が行つて思想史を代引で郵送するからと云ふて送つた。野原で良酒か出来ると聴いて父が五升を買ひて飯田へ遣はした。手紙を書いて持参させた。

読書は多くは出来なかつたが時々睡氣を催したので心行くばかりに睡

つた。午前三時頃鐘が乱打されて城の中村亀太郎の長屋が火災にかゝつた事を後から知つた。凍豆腐の干燥場から出火したと云ふ事である。本町の表具屋が年礼に来て父と共に上飯した。山林会の幹部会があつたとの云ふ事である。大衆党から黨員募集の結果を報告せよと云ふてよこした。下女を下久堅の塚穴へ遊にやつた。

予記 誰も年賀に来るものは少なかつた。心行くばかり静養が出来た。社会の今日 解散不可避で政界日和見の体。

一月十七日 金曜

晴。組合支所より上飯す。県知事凍豆腐製造視察の為来組。中村長治長屋凍豆腐製造より失火し長屋を焼失する。之れか見舞として金式円を持ち又組合よりは金參拾円を持ちて見舞に行けり。上飯し聯合事務所で那農会に列席す。竹村農会長に面会し村内産業統制に付論ず。銀行放課後聯合事務所に行き、今村良夫、市瀬繁、中原、吉野等と猶興社に関し立会をなし、中原の立候補に付如何にすべきやを論し、吉野上京して青年講習会及徳富先生招聘の件、報告をうけたり。徳富氏は来らず。猶興社として今回政戦に乗出すべきや否やに付、議論したるも此際猶興社の如何なる事ありても政戦とは別に進む事とし、中原は民政党立候補となりたる場合は立候補すると明言せり。

予記 日くれたれは銀行に約して吉野、塩沢と中原と予の四人にて種々議論し合へり。吉野曰く既成政党を是認し、之に走るならば政事の改造は最早望まれない。併し中原氏と手を切る様になるかも知れん等と云ふ。

一月十八日 土曜

晴。組合に午前中居りて午後は上飯せり。組合、銀行、作興会、猶興社、多忙なる日のみ続きたり。田中太三郎葬式あり。銀行代表及大平氏の分迄持参して会葬せり。宅よりは金壺円父の名にて会葬。今村良夫に会いて猶興社の件につき左記談をなす。猶興社と今回の選挙とは全く別物として猶興社の将来を期する為全力を尽されたし。中原を猶興社として立候補せしむるも他を立候補せしむるも未だ猶興社微力なり。今後に期すること。夕刻組合本所に立寄りて帰宅せり。

一月十九日 日曜

晴。湧川合名会社より来組し本年春挽糸を売るべく契約取結ふ為、組合支所に於て待つ。午後二時頃来り湧川品次郎に面接し商談意外に早く出来、春日千斤を始めとして黄三千斤及春挽糸を委託販売せしむる事を契約せり。後ミドリに於て晚餐を喫し夜九時頃帰宅す。中原に話会い彼と二人にて上京する事を慫慂せり。併し彼は立候補を他より（民政党）す、められ居り其の就去に決しかね居るもの、如く、上京するや否やも決しかね居れり。

予記 伊原五郎兵衛より思想史の礼来る。

一月二十日 月曜

快晴。銀行へ直に出行す。下田来り作興会青年幹部講習会の件につき来る二月六日夜行出發、吉野、塩沢、今村引率の下に上京受講する事を決し、夫々命し、又中原の立候補を中原の一身上の将来に対して下田より質問ありたれば夫に對し既成政党を踏台としての立候補は此際止めやれたき事を告げたり。又刑事巡査、野沢来行し、総選挙の事

に關し雜談を交ゆ。又中原來行し急はしければ予の中原に対する立候補如何の点に付ては此際、民政党等の既成政党としての立候補は止められたしとの意見を述べ、且つ又猶興社としての此回の政戦には無關心として猶興社を思想史の延長として結社を堅実にする事のみ没頭せん事を話合ひて十分計りにて分る。宅に農事小組合会合あり。集合して秋山農学校技術員及某郡農会技手の養蚕に関する話あり。予も午後三時より帰宅して其会合に列し富民協会の「米八石四斗を実収して」なるパンフレットを農家小組合に寄贈したり。

予記 上柳喜右衛門年賀來訪せり。

発信 信也、パンフレット着報。

社会の今日 軍縮會議ロンドンに開かる。

一月二十一日 火曜

快晴。総会前日なれば総会の準備旁々上飯し出行する。行員賞与金及増俸案等を決定して之を封入せり。電話にて下田にたのみ荒井勝に思想史を委託したれば其の決算を本日中に付ける事を依頼し、又原貞次郎と作興会建国祭に頼むへき講師を誰にすべきかに付相談せり。彼言く来る二六日将校演習会に佐藤中将來飯すければ其節相談して見るべし等話す。又中原へ電話し立候補の如何等話せしに未だ民政党は決せず、北原阿智之助氏を推せとも家庭上の事等まとまらされはとて肯せざる由聞く。且又上京愛国大衆党中谷氏に当地の事情を話すべく上京を誘ひしが未決定のまま分かれたり。浜口氏は首相として近來首相中の首相なり。予は嘗て教化団体にて彼の態度の莊重なるを見しが性格純理に生き其純理を以てグイ／＼進む所敬服の外なし。予め猶興社は今回の選挙とは無關係とする、中原には友人として自重せられた

しと忠告。

社会の今日 議會解散さる。政友解散回避運動をしたと伝へらる。

一月二十二日 月曜

曇雨。齒痛と頭痛とせり。静養し度と思ひしが銀行総会なれば午前九時前に出行す。支店長會議を開き左の要領を口演す。陰慘なる六十五期は金解禁、内閣の緊縮政策等あり不景氣は愈々深酷に襲來せしも、よく其間に処して相當の成績を挙げしは諸君の努力の結果なり。糸価の暴落は必ず単利の少き本年上半期に現はるべし。今より充分なる注意を望む。下半期よりは相當政治も安定し景氣恢復の曙光現はるべし。諸氏に報ゆる所少なきも將來八歩以上の配当をなし得るに至れば相當報ゆる所あるべし。増俸は最下級のものみに止めたり。齒痛止まざりしも総会は午後二時より開かれ、塩原の發議にて重役重任を決し、平穩裡に終了し、午後引続き重役会あり。予は常務として日勤する事能はす且又徒に常務の席を汚すを以て組合長の關係もあれば辞し度旨申出てたるも吉川氏肯せず。遂に空しく終る。例の通り仙寿樓に宴ありたるも病氣の爲欠務す。

予記 伊原を政友は推そうとしたが逃げたり。曰く選挙には腐敗甚しく愛憎をつかしたと云ふ。次て彼の政治道德あるを証すべし。平野人氣なし。彼は確信なき世渡上手な政治家なり。

一月二十三日 木曜

快晴。昨日の病氣は全快したるも静養の爲引籠りたるに丸山鶴來訪して、今村憲長弟利雄を組合にて雇入れすやとの話あり。其の性質も未知なれば何れ青山と相談して後決すべしと話して歸る。飯野雅

芳母死亡し午後見舞に行く。次で組合に出頭せしに石原来組し居り、彼と共に話して決算の状況を見る。対照表より損益計算書等一応見る。青山と総会及理事会等につき下相談を行ふ。夜に入りて帰宅。組合へ銀行より貰ひたる賞与金壹千円を定期預金として預入る。安岡氏の東洋倫理概論を読む。購買品の内肥料鰯粕に付、西商店より買入るを少なかりし結果（鈴木和藏より主に支入れたり）鈴木より買入れたる荷に不正品ある事を西の手にて宣伝したるなるべし。組合の肥料は不正品なりと宣伝したる結果、組合の荷物にケチ付き、組合にては品の不正なるや否やを検せしめたり。当理事中にも何かウマキ事を当局理事がなし居るに非ずや等疑ふものもありたれば、此件は委員へ一任する事とせり。

社会の今日 民政政友共に代議士候補決せず。

発信 中谷武世。電報にて、二七〔日〕コロ〔頃〕行く。イサイ〔委細〕面談。

一月二十四日 金曜

晴。一般に氣候温暖にして未だ本年に入りて一回も流れの結氷したる如き事なく辛ふして凍豆腐の凍る位なり。大氣湿潤にて寒梅等よく咲く。朝より組合へ行き支所にて井深と蛹フルイの状況を聞き本所に行く。朝今村憲長弟利雄を呼びよせ使役してくれと云ふので面接して見る。彼一人前としては物足りない処のある人物なるも社会政策上、雇入れてやる事に決意せり。組合にては本年持分全部を出資に振替るので昨年来より帳場多忙なりしも漸く例年通りの決算出来、次に持分を出資し振替ふる形式をとり、理事会を一方に開きて一方には謄写すると云ふ多忙方なり。漸く理事会に原案間に合ひて出す。之を説明を

自らなす。出資予納金に就て説明が予と専務と異い木下房吉を呼び出して漸く判明したるとの滑稽もありたり。次に理事会終りてミトリに於て各理事及石原を招して晚餐を喫す。話頭に選挙談等も出てたり。多の人の話は選挙の腐敗と人物のあきたらない話あり。石原の如きは棄権論なり。

予記 予は会食中現下の政治家の政治道德のマヒしたるを論し、閣僚中縄付を出すとも内閣はテンとして恥し進退何も出さず平然とかまへ出獄直に議會へ出席して洒々して居る（小川〔平吉〕）ものもあり投票政治の墮落は日々月々に甚しくなると説明し、西洋にては既に投票政治にあひて居る等話せり。

一月二十五日 土曜

晴。組合に於て監査会あり。午前九時より始まる。吉川、塩沢、石原三者来組し之に当り、午前中にて終了す。予は此会合に出席して決算報告書につき、一一説明の勞をとる。午後に至りて上飯す。銀行に行務を見る。民政・政友共に候補者物色中なり。中島三郎来峽し選挙の形勢を検聞し、旁々北原痴山氏を推すべく来飯。常盤に根拠を定めて入り込み居り。彼を訪問して現下の下伊那に於ける政状を話し合ひ、彼に北原氏推薦の談を伝へたるに、彼曰く「若し遠山を推す事となれば予は無言にして去らん。若し北原氏を推す事とならば若干の戦費を出さん」。予は民政党としては北原氏に優る候補者なかるべし、併し北原氏の個人上の立場を考えれば気の毒なり。故に之を推薦候補として北原氏の家政に迷惑をかけざる様に奔走するは君の役なり。果して君此役割をつとめ得るや」と話して辞去し、組合支所に於ける看經会に出席して田中豊春及丘山和尚に会いて清々しき心地となりて帰宅せ

り。

一月二十六日 日曜

晴。組合へ出頭す。惣代会へ呈出すべき事業報告書を作製したるものより順次目を通す。午後二時より聯合事務所に於て海軍中将佐藤臯藏、陸軍中将佐藤清勝両將軍の倫敦軍縮會議につき、又世界思想の大勢につき講話あり。其講話を聴くべく行きしも種々の用件にて全部の講演を聴講するを能はず。此日將校の演習会あり。聴講生として南信新聞總會に列す。此日政友会候補者推薦会あり。平野を推す事に万場一致決したりときく。予は召を受けたるも出席せず。之に至る迄には伊原逃げ、竹村要人の何故伊原を出さぬか平野には反対なりとの大声あり。一般平野には人気なし。一方民政党に就ては同様に北原痴山逃げ遠山と中原との争となり。中原に人気あれども中原退き遠山を推す事と決せり。遠山と平野共に人気なし。福住を訪問して縁談の話をして媒酌人を引受る旨を通せり。次に仙寿楼に於ける両將軍歡迎將校の宴会に出席す。

予記 筒井の河村、河井等將軍の真似及大平の腹オドリ等あり。藤井中佐將校演習の統裁として來飯同席。井戸を掘らしむ。松島鉉、鋤柄正來り堀り始む。

一月二十七日 月曜

晴。汽車中中原と話し又塩沢氏とも話して上京す。朝四時に起き出て、徒歩中原の許に行く。中原に來客二人あり。同じく電車にて辰野迄行き一人は（塩沢）上京、一人中原某は松本へ行けり。朝早ければ中原にて朝食の饗をうけたり。上京の用件は日本主義同盟たる愛国大

衆党に於て立候補を慫慂せられつゝあつたが、中原も予も立候補をせぬと云ふので大衆党より屢々催促をうけ中谷よりも厳しき叱責的小言を送り來つたが其弁明を、作興会建国祭記念講演の爲講師を請求しありしが其講師の相談を、両角中將に依頼するの二要件なり。午後四時渋谷大向に着し両角氏を訪問す。美音なる人にて当地の思想状況等を話し、快く陸軍部内に於ける思想家を物色し出張方を引請けらる。何か用事があるとして約一時間計り話は尽きさりしも割愛して辞去す。予は初対面なりしも中原は六十聯隊にて隊長と仰き居たれはよく承知し居りて話面白かりし。

予記 次て日本新聞社に綾川を訪問し、当地としては大衆党の主義はよいか政策が他の無産政党と毫も異なる点なければ他に政策を掲る事とし猶興社なる団体を組織し団体的に加入すること、及中原も予も立候補出來さる理由は猶興社が未だ生れざるものである事、之に乗して出馬は出來ない事等を話したり。中谷不在なり。銀行及組合へ欠勤する旨申送る。

一月二十八日 火曜

曇雨。汽車中富士見駅にて目を醒まして洗面す。稀有の温暖にて諏訪湖上結氷なくスケート等出來さる様子なり。電車中木下信と同車にて彼より上伊那漁業組合と天龍水電との最後の交渉は次の如く解決したりと聞く。会組より漁業組合へ十五万円提供し、三万円は組合の運動費とし、五万円は設備費とし、残り七万円の利子として年々七千円宛を養精事業に会社より支出する事。辰野支店へ立寄り支店の状況を見て小原支店長に行員異動の内意を洩らせり。直に組合へ出頭し青山専務に*沢の退職金を予に相談なくして何故与へたるかを叱責す。報

告書の概要を見て後、信用評定委員会に提出すべき原案を作製せり。
対人信用二百円の処、此の問題に付て研究し原案を作つて呈出すること
に改正す。以前は原案もなかつた。東京より土産の鮮魚の湯でたる
を書記等に与ふ。

予記 井戸掘成功す。

発信 中谷武世、不在中綾川に話したり、当地の状を。

受信 狩野安造、タケの給金中百円は年明けの三月、百円の半額を
やる。後は六月若干やる。

一月二十九日 水曜

晴。暖にて結氷せず郊外春色を帯ひ気温潤なり。組合の惣代会協議
会あり。朝九時より始まる予定なれは出頭す。午前十時に至りて漸く
開会する事を得たり。今回の決算惣代会は持分を出資に振替たる際な
れば定めて質問も多く、特に昨年は多事多難なる問題のみ多き年柄な
れば言はでもよき不平も出て、定めて惣代会六力敷かるべしと思ひて、
先づ協議会を開き、翌日惣代会によりて一瀉千里議事を進行せんと目
呂見、協議会を開きて見たるに、質問も左程多からず、意外に早く進
行し、午後三時には全部協議案議了したれば、井深をして製糸部の煮
繭機（千葉式）と羽前式煮繭との比較試験の成績及解締と工費の關係
等につき研究の結果を発表せしめ、予の大体方針につきては本所へ煮
繭機据付、産業の合理化等につき話したり。終つて上飯し、銀行にて
金田、原田より報告を聞き、午後五時帰宅す。井戸掘の鉉、ケガを見
舞しむ。

一月三十日 木曜

晴。午前九時より組合本所に於て決算惣代会を開く。決算に就ては
貸照表も損益計算書に就ても別に異議なかりしも、損益計算書の形式
誤り居り、部会の久保田の指摘注意をうけて、直に訂正し、之を後よ
り呈出して承認を経たり。又開会頭初より青島、松田等銅像建設の経
過に就き質問したしとの様子見えたれば、如何なる問題起らんかと雲
行を注意せしに、惣会終了し其場面の空氣を察し、銅像建設の大様を
告げて閉会を告げて松田曰く、銅像建設地を八幡山に出来ざりし理由
は如何、等問はれたれば、田中筭一郎に答へしめたるに、未だ確定せ
されは変更し得るなるべし等答へたれば、然らば役場と学校の附近へ
建設する様条件を付して委員に頼みたしとの動議、塩沢新九郎より出
て、遂に分立し、委員会を開きしも、委員も辞任するに至らず増員も
せず終了し、遂に条件付にて委員に付託する事に決せり。予は条件
付は面白からずと思ひ、委員に注意したるも別に異議なく之をうけた
り。議事終りて粗宴を開く〔後略〕。

一月三十一日 金曜

晴。午前九時より組合本所に於て信用評定委員会あり。出席して信
用程度表を作りたり。会するもの二十名の内十三、四名なり。各人毎
に調査し午前十時より午後二時半に至る。会後粗宴を開く。宴半にし
て聯合事務所原貞次郎と会見して、来る四日町村長会に於て作興会予
算につき承認を経べく各町村長へ召集状を出す。又各幹事へも同様召
集状を出したり。二月十日開かるべき予定なりしものを、県より来郡
して町村長会を、来る三日開催すべきに付、續て四日開催する由なり。
原貞次郎と打合の上、吉野と塩沢も亦来り会し、猶興社幹部会を聯合
事務所に開くべき事を約し、其通知を出す事に決せり。猶又、作興会

青年講習の件につきても、吉野と打合をなし、全責任を吉野に負わしめ、之を遂行する事を依頼す。猶興社に付ては委員会を開き猶興社の事項を打合をなし、中原が立候補につき、若し民政党より推さるゝ事あらば立候補すべし、吾等は極力推すからと云ふ電報を吉野、塩沢の名にて打電せり。

予記 銀行に移りて、吉野、塩沢と話合はせしが、中原は東京に在り、選挙戦を逃れ居れり。

二月一日 土曜

晴。組合は休日なれば直に銀行へ出勤す。父より町村長会が本月十日開かるべき予定の処四日に早められたるを聞き、作興会の予算も同日町村長会の承認を経べき事を感じ聯合事務所に打合て作興会予算編成を急ぐ。銀行に行けば総会以来余り出勤せされは会議録の記入其他行員移動の原案等も毫も出来居らず、仕事のみ多くして気徒に急はし心を落付けて徐々に仕事をなす様につとめたり。竹村要人に銅像の事等話せしに彼曰く「田中筭一等が八幡山へ建立する事の出来さりをふくみ、之か意志返の心にてそんな事をなすなるべし云々」と話せり。午後三時聯合事務所へ行き、下田史郎と打合せて作興会の予算を編成す。同四時より組合支所に銅像委員会ありて惣代会に於て委任せられし役場学校付近へ建立の議に付、学校前を見て鳥清にて夕食を喫して帰る。三十日惣代会にて銅像建設地を学校役場附近に建てると云ふ案に就ては吉川村長に電話にて話せしに、何故そんな事になりしかとの詰問ありたれとも、電話にては話し難しと切る。

予記 愛国大衆党結党式に臨席するもの二十名計り。猶興社を設立し之に加担する方針なりと云ふことを痛知せり。

発信 宮沢弼、銀行用務、佐々木力雄召きて作興会の図書のこと付葉書を出す等を命す。

二月二日 日曜

晴。組合に行かんと志せしに竹村要人來り、組合の話より次に後藤の整理完了したれば成功謝金を五百円の修約の以外に二百五十円くれとの話ありたり。次に木下仙次郎來訪し、村の政友会か如何に運動すべきかに就て相談ありたれば、予は相談には顔は出すも自ら運動等致し難しと逃くれは、組合長にても村長にても同様に選挙はなし得る等グザリかましき文言も出したるも、後に会見を約して去る。組合へ行けは昨日約したる如く銅像委員、村長を訪問して銅像問題に付話さんとせしに、村長は曰く、組合長及専務來りたる上にて話すべしとて頑として応せず、予及青山の行くを待つ。予後れて十一時頃吉川宅へ出頭し、先づ左の意味を述ふ。以前に県にて銅像敷地問題に付て御世話願ひたる礼、三十日惣代会後の協議会の模様を告げ、其に付銅像の位置に付村長の了解を得たしと告ぐれば、村長ひらき直りて「先般組合長及専務よりも再三桜畑と決定せりと聞及ひたる今変更は迷惑なり。組合の事は組合にて勝手にせらるべし」と云ふ事を吉田に云へり。学校前に建てる等の事は今何をも申しかねる。形像取締によるといふ。村長に大に痛棒をくわせられて引退く。田中は妙見山へ位置を定めたるは江塚の意見なりと云へり。村長に拒られたれば委員帰組して種々夜に入りて考へせるも妙案出す、石原に頼みて話せり。

欄外 点灸兩三日間続行。

二月三日 月曜

晴。銀行を休みて組合行。石原を訪問せるも不在に付組合支所に居る。湧川品次郎酒壺斗を携へ来組し、糸の価の話をして昼食を共にして去る。石原を訪問して銅像の件昨日に引続きて如何にすべきかに就き、予も田中筍一郎等及青山との間に間隙出来、幹部不統一を暴露したれば冠をかけて去る方かよろしきやと測りたるに彼は阻止して、そんな事は何時でも出来ると云ふ。予は其趣を聞き、尚八幡耕地が銅像の敷地に付ては桜畑所有者と三角関係にあるを以て、解約の容易ならざる事、及田中青山一派が予が銅像の位置に付反対し居るが如く宣伝し、之がツラ当てにせんと仕くめる策なる事等も彼に話し、参考としたり。彼曰く、此問題は暫く冷静になる迄待たんと云ひて暫く猶予することに話して、役場に向て去る。役場にては軍人会の相談あり、斎藤定雄死したれば葬儀の相談なり。会葬をせずして葬式に参列すること其他を打合せたり。次て農会の相談あり、機械講習に付て組合本所を貸せる事を約す。

予記 竹村要人来り、青山と予に対して学校前敷地は役場とも関係あつて害多し、銅像の敷地となすを得ず。又城耕地は地元として不賛成なり。八幡も六カ敷等話し、青山の考へが組合内部の事のみなるを以て容易に考ふれども左様な事はないと説けり。次に支所に於て猶相談会を開きしも暫く延引するとして決したり。松田政一は銅像の件は田中の失言。上の者反対せんとする空氣等より成れる旨を予に告ぐ。

社会の今日 北原阿智之助民政より立候補。

二月四日 火曜

晴。凍豆腐結凍す。朝直に銀行へ出勤す。行員出勤状況を見るに、原田は真面目に勤むれとも、金田稍遅刻するもの、如し。鈴木清重妻

スズ死亡の訃音に接したれば、弔電及香料金貳円を郵送す。国民文庫刊行会へ書物代金拾五円發送す。午前中銀行に勤めしも、午後に至りて作興会予算決算を町村長会に付議すべき日なれば聯合事務所へ行く。幹部会を開きしも来会者少し。町村長会にては山林会次に作興会の予算会あり。一般の空氣險悪ならんと見越して、他の幹事連中も出席せしが無事通過し、北原会長議長席に就き原幹事説明し、予は実務的の説明を行ひたり。初め若し形勢險悪ならば、此峽長の思想問題を講し、四・一六事件漸く一月二十九日に判決せられ、長野県十四名中十一名の有罪者を出したる下伊那は、尚予算を増加して国民精神の作興を計らざるべからざるに予算をサク減するとは何事ぞと、一言大にやる積りなりしも、平に坦々と承認せられ、終了せり。猶興社準備委員会を和泉庄ホールに開き、会するもの二十名計り。猶興社の進路に付、政治のみならず経済思想総ての方向に進む事を約せり。

二月五日 水曜

曇。直に銀行に出勤す。午後一時斎藤定雄の葬式ありて見舞ふ。父と予と同封にて金貳円香料を贈る。軍人会総会葬下伊那聯合分会、将校会、下士団等弔問多く、龍門寺に於て葬式行はれしか、賑なる葬式にて斎藤の死時を得たりと云ふべし。式後、龍門和尚と無門会の件につき話して帰途組合本所に入りしも、庶務市瀬不在に付、支所へ帰れば湧川商店より田島氏来組し、糸条斑の事に付、工女を集めて批評あり。面白く話し之を聞く。午後九時遅くに帰宅す。在郷将校会が曾て大会を仙寿楼に開き佐藤皐藏、佐藤清勝の二中将を召して口講会を開き、次て宴会を仙寿に行ひしか、其節国民外交として倫敦の軍縮会議に若槻全権を激励すべく打電する事を約しなから未た之を行はす。

徒に酒宴に興して英米二国が吾大和民族の武力を封せんとたくらめる重大会議に対し激励の打電を等閑に付するか如きは在郷将校の意気何れに在りやと憤慨せざる能はず。

二月六日 木曜

雪八寸。夕より降り積った雪八寸に及ぶ。本年初めての大雪なり。組合に行きて電話にて青山に総代選挙の通知及手続等を指令せしに、彼は各耕作地の管理者に選挙場所、時日等を一任し選挙の告知迄を管理者に一任せんと主張し、何程説いても頑迷なり。仍て選挙の告知は組合長の名義にてすべきものなる事を説き聞かせて、漸く選挙の手続等をなさしむ。期日は十三日とし、組合員に通告せしむ。江塚佐三郎と話して、十一時上飯聯合事務所で作興会の仕事をなし、中谷より講習延期の旨電報ありたるに對し、今夜行講習生出発すければ決行する事、余は吉野より聞入るべしと申送る。其他建国祭ボスタの事及猶興社の件下田に命じて銀行へ行く。午後五時再聯合事務所に至りて集まれる青年に對して一場の講習に關する注意を与へ、飯田駅に五十八名の講習生を見送りて帰る。今村良夫、松島等之れか引率をなす。安岡氏へ古露柿一箱及思想史一部を贈る。

予記 平野、北原の選挙追々言論戦に入る。北原の方六分平野四分の予想なり。

受信 中谷より講習中止せられたしと電報あり。

二月七日 金曜

晴。銀行出勤後今日は久し振りに何の予定もなければとて午後五時山本を訪問す。山本村に入れば雪深く積りて、坐るに寒村を思はしむ。

夜のふくる迄話して寝に付く。父兄を歓待してくれ面白く話せり。久しく山本を訪れ心行くはかり父の膝下に閑談を試みんと宿志果すを得たり。

二月八日 土曜

晴。朝十一時山本より銀行に出勤す。夜七時半四王天中将作興会の招きに應じて着飯すべければ駅頭迄出迎へたり。中原も出迎へ共に蕉梧堂に入りて休憩して四王天中将と時世の推移を慨し、思想の混乱、団体の将来を憂い下伊那に於ける思想状況を話して夜半に至り、談面白ければ遂十一時の自動車にて帰宅す。四王天中将は予想したるよりは若く、風貌も亦柔和にして武人としては稍世才多けれども、交際は上手なり。

二月九日 日曜

午後一時より聯合事務所建国祭を開く。中等学校生徒多く、其他有識者共三百人計り集まり、小笠原与太郎祭官となりて神式を行ひたり。式は神を建て降神昇神の詞あり。原幹事長建国頌を読み小西町長立つて式後 天皇陛下万歳を立唱す。予及中原は之が司会をなせり。式後四王天中将の講話あり。四時間に亘りてマルクス思想の根源より、猶太問題、世界の秘密結社等を説き、最後に日本国体の尊嚴なる事、世界に比なき事を演ぜられ、衆皆感動せり。夜に入る迄の講演なりし。終りて蕉梧堂に小西、掛川、芝原、春日、北原、足代少佐等会合して、猶四王天中将より話を聞き、十一時迄時の移るを知らず。

二月十日 月曜

午前九時上飯し、直に蕉梧堂に四王天中将を訪問し、揮毫を乞ふ。

午前十一時より神稲村青年会の聘に応じて四王天閣下行かんとせられ、元島某等と関口善三之に伴ひて行す。午後銀行に出て後、午後三時より組合支所に於て組合役員会ありたるも、銀行業務多くして役員会大半終了の頃出席するを得たり。問題は最後の惣代会を（協議会）開き、銅像問題を講せざるべからずや否やを諮るべく協議会の必要如何。剰余蘭の処分を一任せられ度き事。惣代選挙に関する件等につきて協議せり。役員賞与は組合長、専務、田中、江塚、吉川の五名に委せられをれば、予は青山専務の名譽職なることを話して、青山専務に多くの賞を頒たれん事を論し、江塚、吉川、田中にて予と青山分を二五〇、五〇〇と定めたり。龍門寺に参して夜の参禪をなす。

二月十一日 火曜

晴。龍門寺へ接心に泊りたり。松江大兄と共に語り共に寝る。小学校に於て午前十時より記念節あり。助役建國頌を読む。龍門寺に帰りにて参禪并追つとめたるも世間低のみ多く頭裡を往來して念熟するを得ず。午後三時福住に法要あり。正永寺に詣てしに既に法要終りし親類喫茶しつつあり。仏壇に参して福住に立寄り、婚礼の話をなし打合して明日の仕度は出来たり。

二月十二日 水曜

曇小雪寒。本年随一の寒気なり。朝起きて六時龍門寺に詣れば既に朝の喚鐘過ぎて禪室静寂なり。因て七時竹村要人方を選挙の件につきて訪問せしに、二階の仮寓に召せられて事務所を「観月」より警察の注意にて撤廃し移動事務所としたる事、及本朝主なる幹部を召して各

耕地毎に結束を堅くして選挙に望む旨の話あり。予は福住の結婚あるを以ての故に直に辞して、龍門寺に入り一回参禪したるも、既に三年来持ち合わせたる公案「汝の精根を尽し持ち来れ」なるを以て老師の一撃をうけて退出し、家に帰りて福住の件打合せたり。増恵は午前十一時出飯す。予は午後一時より組合支所に於て銅像委員と役員と打混して会合を開き「困つた話をせん為に惣代協議会を開きたり」との意を決して総代会に臨む。石原も来り相談す。協議会に臨み、一応の挨拶して「銅像委員は条件付ては困る」との趣旨を話し、議論百出したるも中途にて青山に譲りて去る。

予記 福住に着すれば午後五時半なり。仙安に行きて式場をと、のえ予か式を司祭す。天照大神の幅をかけ、其大前にて誓約詞を読み、天地神明に誓ひて後三々九度の盃事をなす。

二月十三日 木曜

晴。組合惣代の改選日なり。各耕地委員を管理人に推薦して選挙を行はしむ。新井耕地も飯野又一、森本晴男の二名管理者なり。立会人は中島勘一と新井実なり。之に立会て其模様を見る。午後より組合支所に行き、青山と会いて理事監事の賞与金分配案を見る。決定して之を分配せしむ。今回の惣代選挙では大に其の人名も更り、各耕地より理論家も沢山輩出せり。吉川と電話にて其状況を話せり。彼組合員にあらざる稍無責任なるが如くなり。午後三時より龍門寺へ出かけて老師の提唱を聴かんとせしに既に講了なり。一夜を坐して明さんとせしが昨夜宴会に疲労したれば居睡続出して席に堪へず。帰宅して眠につく。夜一度入室して見解を呈せしが、徒に鉄壁を拳らんとするが如し。世間底と室内とは雲泥の差なり。若し室内の如く一般の世間底を行はゞ

唯豪の者なる敬称を得んのみ。

二月十四日 金曜

晴。朝銀行へ直に出勤す。禅堂修業は稍懈怠せり。昨日より持ち越しありたる公案「汝の精根を尽し持ち来れ」を負いて参禅すれと少しも鉄扉開かず。老師本年は珍らしく厳然とかまえて寸の許す所なし。三年来少しも参研せずして放置したる公案なれば一生懸命に三昧に入る事も出来ず。事務の間に或は飯田へ往復の暇に考へたるも何の名案も浮はす。或は老師に一等を与へ等して叱責をうけて退きたり。午後三時より無門会最後の提唱を聴かんとして出つれども遂に聴くを得ずして終る。夜に入りて又一回参禅の機ありたるも、平野の演舌会ありたれば小学校へ出頭し末輩の演舌を聴きて伊原の「平野は蜚糸界唯一の権威なるにより予は平野を推薦す」と云ふ五分間の演舌を聴きて龍門に帰り和合茶礼に出席し、ハイハイ坊等のマネ、腹舞等をなす。和合茶礼終了後、平栗、市村、松江等と決算をなし不足金貳拾五円を得たり。

予記 選挙は平野も北原も共に戦費僅少にして原田派稍軍資あるらしけれども警察に引かれて運動苦しきか如し。

発信 四王天延孝

両角三郎

社会の今日 平野演舌、松尾小学校にあり。

二月十五日 土曜

晴、凍。龍門寺に泊して朝副司寮の仕事を片付けたり。本年は選挙其他にて会員も少く無門会の会計最も困難なり。不足金二十五円計り

出来たれは金五円を施入として寄附せり。松江、林蓬、快哉と予の四人にて会計をなし、報告書を寮の入口に掲載し、老師に面接して点検をうけて後組合へ寄らずして直に銀行へ出勤す。途に聯合事務に立寄り作興会の件に關して下田に命ず。思想史は西沢に於て引受けられず、事務煩瑣なるを以て聯合事務所に移さんとす。佐々木力雄より斎藤定雄の後釜として役場に出勤方を委頼せられ本塩助役に問合せたる処、既に物色して出来たれはとの返事に其旨電話にて佐々木に報ず。生田村より安岡正篤又は蓑田胸喜の内何れかを頼みくれまじきやとの話ありしも、他の一二ヶ村と協同主催しては如何にやと答へやりたり。銀行へ竹村要人來行し、予に面会したければとて会いたるに、平野選挙費なくて戦出来ざれば何とか心配しくれさるやとの話に、平野の承諾を得て松尾村へ費消すべき条件付にてならは金五十円位の寄附してもよろしきの由答へて返す。併し彼予を与みし易しと見たるが如し。此後は少しキツク当るを要す。

予記 龍門寺に於て夜組員従業員の法要あり。午後六時より出席す。組合長として第一に焼香す、遠検來拜す。老師の日隠禪師の娘と其子の話あり。円連和尚の禅坐生活の話あり感謝生活の話あり。

両角三郎、四王天延孝へ柿を送る。

発信 新井集会場に於て女子会あり。円連和尚來講す。

二月十六日 日曜

晴。日曜日に於て又十六日なれば組合も休なり。休養せんと朝八時迄静に臥す。今日は龍門寺に於て大般若及施餓鬼会ありたるも家居して家庭の団欒をなすの暇少なければ、家庭の暖和に接すべく風呂の修繕を見たり、花を生けたりして午前中家庭の団欒に浴す。敏子來訪し共

に炬燵に談す。午後増恵と敏子と下女を伴ひて龍門寺に参詣す。予も亦賜松老師を見送るべく午後二時半龍門寺に詣てしも、既に老大師出発の後にて増恵代理として見送たり。組合支所に入りて青山専務が田中荀一郎を伴ひて横浜へ出張し、日米会社に生糸売上金の請求に出発するに付、市村を督して其準備をなさしむ。夜再び組合に行きて青山、田中と打合せて横浜日米会社との交渉に付話合せて帰る。家庭にて五平餅を焼きて家内団欒して食す。父飯田行。読書せんと志せしも果さず雑用と閑想に耽りて終る。選挙の為立会演舌会等飯田にあり、青年を以て埋まると云ふ。湯殿に鉄管を引きて井戸水直に風呂に通する如く装置せり。

予記 中島安一妻トシオ来訪し村税等級下の話あり。子供も徴兵中なれは何か勘考してくれと云ふ。次に子供目下農学校へ通学し居れは今年卒業なるも若し組合に明年雇ひくれば組合科へ出してもよし如何との間には、一年先の事に予約出来すと答ふ。

受信 宮下友雄

二月十七日 月曜

晴。組合支所へ行く。青山専務出浜中なれはなり。江塚と表の薪材の処分を講せしめ又本所よりの書類を見、且又大沢と木下との事務の分担を定め申渡し、庶務は大沢と木下と相談してやれと云ふ。木下竹之助来組し面会せしに、選挙の話と竹村の寄附金募集の話あり。又俸の銀行へ雇入方の話ありたるも、代用教員を止めるは却て策の得たるものにあらざと談す。午後銀行に出勤す。竹村、市瀬兩人来り、先日竹村と話し引受けたる金五十円は原文吾の手を経て寄附する事を竹村に渡す事とし、各耕地へ分配する事等も竹村より聞取りて竹村に話せ

り。後より吉川も酒四斗と出す事となりしと聞けども甚面白からざる事なりと思へり。文吾氏に托して平野氏の窮状を察して金五十円を寄附する事とせり。吉川亮夫と午後六時より八幡B〔銀行のこと〕支店にて会し、銅像の問題に付て議し十一時迄話せり〔後略〕。

発信 吉野、前沢岩雄、織田緒一郎

二月十八日 火曜

晴。民政党立候補には始め北原なりしも辞して受けず、次に中原、遠山の兩人に回り、中原辞して遠山となりしが内部に不平等、次に滝沢を不承諾にてかつき、之が辞して遂に北原阿智之助立つ事となれり。政友は初め伊原、山口、山田等の声あり。平野最も不評なりしも伊原辞して受けす山口も同し。次に最後に平野を伊原が推して遂に高田派と握手せしめて満場一致平野を推す事とせり。組合支、本所へ行く。庶務を見て午後一時上飯す。途中城下運動場に於て、豊橋騎兵隊（寒地行軍来峡一中隊）の乗馬演習、馬術等あり、之を立見して二時銀行に出勤す。放課後帰途龍門寺を訪問して菓子一封を贈り、ゴム靴を持ち帰れり。選挙には多くふれず、三区は北原、戸田、宮沢胤男、平野、林七六、山崎一男（社民）、原田二郎（山田阿水及大衆新聞社支持）ありたるも、林、宮沢の内一人落選せんかと予想せらる。長野県下政友にて当選するもの五人かと予想せられしも、或は四人かとも疑はる。

予記 民政派は北原阿智之助伝と著書の広告を各地に張り出したり。中原著其他は立看板のみなり。

二月十九日 水曜

雨。民政は戦術巧妙にして人気あり。之れ北原氏の人格と政友会の多年放漫政策に倦きたる一般の声と、浜口首相の厳然として消極政策をとれるに民心帰したるものなるべし。北原と平野と合して他の輸入候補を鉄撃するの策、功を奏し、原田派検査多く、新井にても伊*孝*及*山*応等警察へ引かれたる話あり。人心競々たり。予は今回の選挙には余り関係せず、松尾村に事務所も張らず、竹村要人主となりて之に執筆す。午前九時出て、組合支所に行き井深と二部制に付て研究せり。併し、若し原料繰糸不可能の時は五月廿日頃迄繰糸する事として、繰糸は解決せん事に決心せり。青山、田中の上京着より何等の報告なし。午前十一時半上飯し銀行出勤す。店頭一般に閑散なり。原幹事長来訪したれば、思想史及組合製糸の伊那社問題に就て研究し、自働繰糸器採用と伊那社工場統一問題と関連して、此際取るべき方法に付て予の意志を吐露したり。後放課後松沢を信聯支所に訪問して同問題に付彼と話す。市場喜代選挙の問題に付来る。

社会の今日 北原、平野共に軍資金なく戦況好し。

二月二十日 木曜

快晴。快晴無風暖にて外套は不用なり。午前九時組合に出張して工場を一巡して空釜をつめる話をして役場投票場に行く、正午なり。平野派即政友派四分の勢なり。投票終了後直に上飯す。今回の選挙には予は少しも関係せず、唯僅少の費用を平野の為に寄附して援助せるのみ。喜代をして耕地内の状態を捜らしむ。中島勘一は猪佐雄より頼まれて民政に走れり。丸山鶴弥引退して出て来らず、北原派も亦運動費の為氣勢を揚げすと雖も、田間、高橋、青島の一味連繋して運動し居れり。竹村要人は唯一の政友の運動者なるも一般の評不良にて却て人

氣を害するもの、如し。山口英九郎氏より蜷一氏寄贈せられたれば之を隣、銀衛、善治、焼酎屋、喜代、中島等及明河原、羽根等へ一升位宛分付せり。

予記 政友四、民政六の勢と観測せらる。

二月二十一日 金曜

晴。組合支所より銀行へ出勤す。青山帰来し、支所に於て会見す。日米の売上残金とれたりと聞きて安心す。上飯し出勤せしに丘山和尚来行し、銅像問題に付平栗心配し居れは一度会見したしとの申込あり、如何にすべきかとの事に、然らば予は彼の親切にほたされて日曜日二十三日の夜、寺に平栗と会見すべし和尚に話して分れたり。僧導謙、伊那電新株払込金を払込むべく来行せり。午後三時半より本年採用すべき商業学校卒業生五名計に対し人物考査を行ふ。原田と頭取、予と金田と二派に分れて試験せり。家庭の状況により人物に差あるを見る。沖村義一選挙の為帰省し、立花にて会食する筈にて考査後行きしが、原、下田のみ居残りて沖村居らず。よりて禪に沖村に面会し、久し振の面会を喜び八時半の電車にて見送り帰途。中原を訪問し、酔余クダをまきたり。席に館林外一人の巡査あり。又松島、五十嵐等加わる。

予記 銅像問題に付て中原の意見を問ふ。夜半にして帰る。

二月二十二日 土曜

晴。組合支所より農会評議員会あり出席す。午前九時より始まりたり。主に人事問題に付初めて相談す。秋山を補習学校へ専任として県より補助をうけつゝあるも、之を月俸を安くして使用せんかとの相談ありしも、給料を安くする事は出来ざる処なれば、暫く其儘として使

つては如何との説もありたり。午後より上飯す。聯合事務所と女学校の両所に於て開票し、前日諏訪郡上伊那開票あり、戸田一八五〇〇、林一五七〇〇、宮沢一五〇五〇を獲たれは本日の開票如何にやと片唾を吞んで上飯するもの多く、所々に開票の結果を掲示して觀衆の氣を引き、觀衆多く佇立して興味を以て見る。午後五時理髪に行きて其状を問ふに平野危しとの事に、万一彼落選せは氣の毒なりと思へともせん方もなし。東京第五区より大山郁夫當選して国士北吟吉先生落選せし由を聞き、国家の前途寒心に堪えず直に左の一文を北氏に贈る。

「南風不競、惡戰苦闘、国家の前途憂慮に堪えず」。

予記 帰宅して父と酒を汲み平野危しと告げ、寢室に入りて臥す。虎史郎へ山口氏より贈られたる蜆二升を分与せしに却つてカジカの上等を多く贈られたり。龍門寺和尚を訪問して銅像の件に付平栗と話す事を約す。

二月二十三日 日曜

晴。春日□々暖なり。身を起して組合に行くにもものうく書齋に閉居して静養すれども、組合の銅像問題より、自治、組合の前途等考ふれば考ふる程多事多難にて、身体は静止すれども心中悶々す。午後に至りて組合本所に向し事務を見る。後夕刻に至りて支所に來り青山専務と打合をなす。銅像位置問題より初めて生糸手数料問題に移り相談すれば、前者に対しては青山云、役員会を開き大体の位置を決定せんと。予は之を拒んで役員会を開くはよけれとも位置を役員会に於て決定するは何れ委員を選走するに支障を生すべし、故に役員会を開きて相談するはよけれとも位置を決するは賛し難しと云へば、青山云、既に妙見山へ戻すべく惣代は選挙出来、各連判状をとりて県に迫るべし

と云ふ故に、先つ役員会に於て決したる方よかるべしとの事なれば議論別る。次に生糸手数料を湧川に8%を出したるは面白からすと云ふものありとの事に、予曰、それはセリブレン点数一点出ては手数料1/1000位は奨励として何を妨けん、一一疑を以て組合長を見は事務は出来ない、元來君は何故之点に付予に相談せずや、田中とのみ相談する前に予め予に相談すべしとて、田中の云ふことをのみき、て予の言を信せざる如き青山の態度に一撃を与ふ。談すれともつきされは青山を戒めて先つ予に相談すべしと云ひやりたり。修養会役員会あり、一寸顔を出して去る。龍門寺に行きて平栗と和尚に対座して銅像問題を論す。予は大体の経過を平栗に話したり。和尚は平栗を伴いて江塚と接すると云ふ。

二月二十五日 火曜

晴。支所に到り事務を見て後、午後一時半上飯す。銅像問題に付て粉乱し來り、組合長の腰の弱きを批難するあり。村長の態度の私怨を以て銅像に対する旨説くものあり。有産階級を撲滅せよと説くものあり。竹村要人を使駆して銅像を建立せしめざらんとする陰企あり等云ふものあり。組合長が全々銅像に同情なし、彼を存せは銅像は出来ず、責任を問へと云ふものあり、村論囂々たり。予は此間に立ちて平然として黙々として之に對せり。帰宅の途上支所にて青山専務と会見し、専務が銅像の件につき相談中、予は来る三月六日の記念日は延期しては如何と云ひたるに、そんな事は組合長専断は宜敷からず、宜しく理事会に問ひたる上にすべし、より論始まり、予は全体専務が予に第一に相談してもらい度し、他に相談する前に予に相談かけられたし。又予と君との相談の秘密事項が他へ洩る、事屢々あり。此の如きは面白

からず、若し予の考の及はざる事は反対せるもよけれども他の力をかり来て組合吾をケンセイするが如きは宜敷からずと告げたり。又予と君との間は密接にして離るべからず。私印をして借金もして居るなれば、予と君との間の不和が世に知るれば組合員の疑を招き組合の信用にも及ぶければ充分注意せられたし。先づ田中に相談する前に予に相談せられたし。夜陰木下千之助と丸山鶴弥と同行して予を訪問し、今日専務及組合長を除きたる理事全部ミトリに集まり組合長の不信を述べ、明日支所にて右理事全員より忠告を發する手筈なり、右御注申すと。予もそんな事もあらんと覚悟して冷静に之に対す。

社会の今日 組合対予との関係暗雲低迷し四面楚歌なり。

二月二十六日 水曜

雨。暖雨降り凍豆腐腐敗して大なる損害なりと云ふ。午前七時頃組合より使者来りて「専務以外の理事集まりて御話したければ支所へ来られたし」との迎へあり。予は九時に出かけたり。果せる哉、理事皆参集せり。予は被告の如き位置にて出頭すれば、裡の病室の一室に於て、市瀬より口を開いて曰く「今朝は専務以外の理事集まり、組合長が銅像問題に対する態度及専務青山との間に激論ありたる模様なれば、之に付組合の前途を憂ふ吾々の意見を申上げ、且組合長の意見を問はんと集まれるなり」との冒頭に、田中より、予と専務との間に何かありはせぬかとの間に、激論等は時々あるも予は左程には思はず、予の虫の居処と専務の虫の居処により或は如何様にヒキシやも知らず、されども予は専務と予との間の密談が時々他に洩れるので、予は専務に其点を責めたり。田中曰く、組合長として聞き捨てならぬ言語を弄せしと聞く。曰く「判をせぬから知らぬ」そんな事を言はれしや。予

と専務の私語を一一説明するの義務なしと思へとも、疑問に対しては向はん、「私判をしたから此不統一が組合員間に知れたる時は私財迄も提供する事となるべし、故に□□れたしと告げたり」、被告あつかひするならば、予は組合長として職に恋々たるものにあらず。吉川理事より幹部不統一の責はありと云ふ。幹部の不統一は御尤なり、併し是れ諸君に於ても充分注意せられたし。最後に予は、諸君が此催しは組合長の処決を促すものなりや否やをたしかめたるに、忠告なりと云ふ。然し右忠告は有難拝聴すべし、併し前組合長時代にも不評事項はありしも、此の如く理事全員より忠告をうけたる例なし。よって此事は殊に重要な事項として将来組合の為各位の自重を望み、予としては感責する処ありと結びて閉す。午後一時より役場の予算村会に臨む。帰途支所にて青山に会见す。之も先般の事項を話し、マア怒らぬ様に組合の為努力せられたしと云ひ、青山も予が銀行を止められたしと忠告あり「以下二〇字分程判読不能につき後略」。

二月二十七日 木曜

曇。午前三時帰宅して床に入る。八幡支店に於て吉川と話して帰る〔中略〕。午前九時より役場に村会委員会あり。予は第一部として歳入の委員となり午前十一時漸く出勤す。併して委員中福島主となり之れが審査に当る。遊興税減額の他に比して大なるにより修正案を出したり。竹村より炭焼奨励費五〇〇円の増額呈出等あり。明二十八日の予定を変して今日中に予算終了すべく決し、午後四時に村社に参拝し、組合関係のものは分れて本所に役員会を開き、林梅太郎土地分譲の件、組合記念日、惣代会開催に関する件等につき打合せをなし、最後に銅像建立地に付研究し、熊谷平、城耕地の学校前に関する意見、即ち竹

村の意見なる事等につき話し、最後に予の意見を求む。予は昨日午前中支所に於て他の理事連中に対して公言したる手前もあれば、望まらま、に左の明言をなす。「銅像の敷地は第一案は桜畑、第二案は本所又は其附近なり」之を研究する事として散す。

社会の今日 銅像問題に関し、清水、毛賀、明の一部等、予に反対の声上り、攻撃の中心点となる。

二月二十八日 金曜

雨。村会昨日にて終了したれば今日は銀行へ出勤す。組合の銅像問題粉糾し、之を吉川、森本の寡頭政治となすものあり、ブルジョア政治の弊となすものあり、之を倒さずんば村自治の光明を望む能はずとなすあり、銅像が不当のものなりとなすあり、之を自治功労者として学校前に建設せんとするあり、妙見山北に建てんと復活を努力するものあり、銅像を御輿の如くかつぎ廻さんとするあり、粉々として帰する処なし。組合長及理事に責任を問はんとするあり、予も処決せんと決心し居るも、併し無責任の謗を免れんとして其時を俟つ。商業学校長を訪問して行員三名の採用方申込みて学校の都合を問ひしに、学校は十五日卒業式なれば其後ならは何時でもよしとの返事あり。聯合事務所へ帰に立寄り、去年作興会講習会の件を聴く。赤化青年あり不服の事もありたりとの話ありたり。次て福住に立寄り縫返しの話をして帰宅せり。組合の件は粉乱し居るも未だ新聞には発表せられず。